

さ5尺に積上げた容積を1棚又は1間と称して、授受の単位としました。大町の線で城下を南北に二分し、北方は殿の木場、南方は長町の木場で現物が支給されました。無償の配給でしたが、禄高によって数量に差があったので、上級家臣は余分を、城下の酒造業者に払下げたものだといわれます。醸造に要する相当量の燃料も、それだけで十分だったともいわれます。なお、長町の木場・木場東・木場後等の地名は、当時の木場に因むものであり、「木流堀」は、名取川を下ろした流木を城下近傍に導入する必要上、名取川本流の富田附近から広瀬川を結んで堀鑿された延長約6キロの運河であります。

注(1) 仙台領胆沢郡水沢の農伝兵衛の次男、幼名卯七。15才の時仙台城下に出て、八幡町肝入伊藤仁兵衛に奉公。人並すぐれた実直勤勉さを見込まれ、その養女と結婚した。寛永5年〔1793〕国分町に進出して表店を構え、臘の専売特権を得た。翌年、山林方請負をして長町廻流木事業に従事し、その励精奉仕の実を認められ、時々恩賞を受けた。また、宮城郡・名取郡において新田を開発、文化9年〔1812〕大洪水で流失した中瀬橋架替えの費用総額360両の献金、熊野堂村での杉の植林、文政5年〔1822〕の荒町大火、翌6年の片平丁大火の罹災者救恤等数々の社会的貢献を果たした。勤勉力行商人として成功したのみならず、その一方、公共的な役割にも仙台商人の心意気を見せた人物であった。文政7年〔1824〕6月14日歿、54才、竜宝寺に葬る。「東藩史稿」（作並清亮）卷之32に『篤行。伊藤記通』としてその略伝が記されている。

注(2) 方言書「浜荻」に『こまぎ 小真木なるべし。まき。』細木（こまぎ）で小薪の意であろう。

注(3) 「長町木場について」（大竹誠一、「仙台郷土研究」復刊第1巻第2号の内）に『長町木場は元文元年〔1736〕頃に創設され……』とあるのは時代が下り過ぎているので疑問である。

資料 大漢和辞典第12巻（諸橋轍次）
大言海（大槻文彦）

121 「金蛇水神社」の読み方

問 「『おくのほそ道』をたずねて」（金沢規雄著）のP.90に『三色吉（みうるし）の金蛇水（かなへびみず）神社は……』とあります。金蛇水神社の読み方は、この振り仮名の通りでよいのでしょうか。

答 『三色吉（みうるし）の金蛇水（かなへびみず）神社は、水速女命〔みつはのめのみこと〕を祭

神とする。一条天皇の御代、京都の三条の人小鍛冶宗近が、勅命を受けて霊水をもとめ金蛇水を発見した。だが群蛙（ぐんあ）がこれを汚濁するので鉄を截（き）って雌雄の金蛇を作り、水中に投じた（一説は神社に奉納した）ところ、霊験を得て害を防ぎ、宝刀を鍛えて栄を受けたという伝説がある（「名取郡誌」「宮城県史16」「岩沼物語」）。今日では、境内の牡丹園が有名である。』以上の原文にある「金蛇水神社」は振仮名にある。「かなへびみず」ではなく、「かなへびすいじんじゃ」と読むべきです。

何故ならば、この神社は「水神」〔すいじん〕だからであります。「水神」とは、飲料水をはじめ灌漑用水など、総ての水をつかさどる神、また、火災を防護する神といわれます。「封内風土記」巻之5（田辺希文）に

『三色吉邑。戸口凡五十一。神社凡三。熊野神社。不詳何時勸請。雷神社。同上。水神社。同上。（下略）』とあり、その中の水神社が金蛇水神社のことです。この金蛇水神社の読み方を、ルビを付けて明示している図書を下に挙げます。

1. 「宮城県史」16

『金蛇水神社』

金蛇水（かなへびすい）神社は千貫村の三色吉（みうるし）に在る。三色吉とは、同所河原谷地に三色の葎が茂っているところからかくは名付けたという。⁽¹⁾祭神は水速女〔みつはのめ〕命である。一条天皇の永祚元年〔989〕九月、勅命により京都三条小鍛冶宗近が宝刀を鍛えるため霊水を求めて此の地に来り冶炉を構えた。初め霊水を発見するや、群蛙のため霊水を汚濁されたので、鉄を截って雌雄の金蛇を作り、水神宮に奉納祈願したところ蛙を防ぐことができ丹精を凝らして宝刀を鍛え、叡感を賜ったという。この金蛇は金蛇水神社神号の起原で、今なお、神宝として秘蔵せられている。遠近信仰する者多く、五月十五日より十四日間及び十月十五日の祭典には岩沼町から臨時バスが運転し、外苑の牡丹畑、躑躅の小丘、更に神社西方の山腹に七箇の池塘〔セツ池塘（ななつつつみ）〕を縫って、行楽を兼ねた参詣人で大へんな賑いを呈する。県道から神社へ入る道の角に河原ノ松、その東五丁餘の田圃に大尊壇がある。大尊壇は三条小鍛冶宗近が冶炉を据えた所だといひ、鈴木省三の建てた碑がある。』

2. 「宮城県神社名鑑」（宮城県神社庁）

『金蛇水（かなへびすい）神社』

鎮座地 岩沼市三色吉水神8

祭神 弥都波能売〔みつはのめ〕神

例祭 五月・十月十五日

由緒

本社の創祀年月は明かでないが金蛇水神の社号については次のようなことが伝えられている。一条天皇の永祚元年（989、平安）9月。京都三条の住人小鍛冶宗近が勅命によって巡国の折こ

の地に至り、社頭に流れる清流を見、天皇の佩刀を作ろうと冶炉を構え、水神社に参籠し丹誠を凝らして鍛え、歡感を賜うたので宗近はこの神恩に報ゆるため雌雄の金蛇像を献じた。爾来水神宮を金蛇水神社と称するようになったという。(社伝・囊塵埃捨録) 先年、玉崎牡丹園の牡丹を移植して庭園とし、又山につつじを植え参拝者を楽しませ、季節ともなれば近郷近在の参詣者多く、年毎に神社が栄えて来た。

境内社 金蛇弁財天社

社殿 本殿 流造 19.42坪

拜殿 春日造 132.26坪

宝物 宗近作蛇体3

弁財天像(等身大)

社名額・伊達綱村書

境内地 1,759坪

氏子 崇敬者 35,000人』

3. 「たるま随筆」(山田勇太郎)

『金蛇様の正式の名称は「金蛇水神社」で「カナヘビ・スイジンジャ」と読む。往昔京都の三条小鍛冶宗近という刀匠が、勅命を受けて東国を巡った折、ここに鎮座する水神社の水の良質なことを知って、ここで刀を鍛えたところ、果せるかな、みずから欲する名刀を得た。宗近はここを去るにのぞんで、雌雄二体のヘビを作ってこれを水神に奉納した。それが現在の御神体で、以来「金蛇水神社」と呼ばれるようになった。』

4. 「宮城の伝説」(佐々木徳夫、吉岡一男、武田八州満)

『東街道を南下すると、仙台近郊の人々の信仰の厚い金蛇水(かなへびすい)神社……』

注(1) 名取郡の旧村。明治22年南長谷・北長谷・長岡村と合体して千貫村となった。昭和46年岩沼市に合併した。

資料 宮城県史16

宮城県神社名鑑(宮城県神社庁)

たるま随筆(山田勇太郎)

宮城の伝説(佐々木徳夫、吉岡一男、武田八州満)